

企業インタビュー 株式会社リクルートキャリア

新卒事業本部 領域企画統括部
就職支援コミュニケーショングループ 首都圏チーム

リクナビ副編集長 **大谷 康人**

Q 2016年卒業対象者から就職活動時期の変更について教えてください。

(※取材日である2013年8月30日時点での情報)

A こちらについてはまだ具体的に決まっておらず、現時点で分かっていることをお話しさせていただきます。

Q 就職活動時期が後ろ倒しになることで、どのような影響がありますか。

(※取材日である2013年8月30日時点での情報)

A 今回の決定の影響については様々なことが言及されていますが、こちらは学生にとっても、企業にとっても、良い点と懸念される点も、双方あると思います。まず、良い点ですが、学生側で言うとうと学業と学生生活に専念しやすくなり、充てられる時間と相応に長くなること、はひとつあるのではないですか。これまでのスケジュールだと、入学後2年で将来を考えなければいけなくなるので、ある意味、自身の専攻や今後目指す専門領域が明確でないまま就職活動に突入する学生が少なからず存在していたことも事実でしょう。中にはゼミや研究室に配属される前に、どんな専門分野で勉強していくかこれから決めようという時期に就職活動が始まっていたので、自分の進路や将来やりたいことがこのタイミングではイメージできず悩む学生も多かったのではと思います。とりわけ短期大学の学生はその傾向が強かったのではないのでしょうか。また、違う側面としてインターンシップに参加できる機会と時間は増えるので、こちらはチャンスと捉え、ぜひ積極的に参加を考えてほしいですね。自身の将来を考える上で、社会人と触れ合う機会・仕事や業界の理解を深められる機会は、学生にとっても企業にとっても決してマイナスではないと考えます。

一方で懸念されていることもあります。「3月採用広報スタート・8月選考スタート」と方針決定はしたものの企業側の実際の動きには未確定な部分が多くあり、これから随時表明されるかとは思いますが、学生側からすると「ここが明らかにならない限り多少の不安は残るでしょう。また3月4月は企業の人事にとって繁忙期でもあるシーズンなので、例えば学内外の合同企業説明会の実施時期なども、良い点と懸念される点も、双方あると思います。まず、良い点ですが、学生側で言うとうと学業と学生生活に専念しやすくなり、充てられる時間と相応に長くなること、はひとつあるのではないですか。これまでのスケジュールだと、入学後2年で将来を考えなければいけなくなるので、ある意味、自身の専攻や今後目指す専門領域が明確でないまま就職活動に突入する学生が少なからず存在していたことも事実でしょう。中にはゼミや研究室に配属される前に、どんな専門分野で勉強していくかこれから決めようという時期に就職活動が始まっていたので、自分の進路や将来やりたいことがこのタイミングではイメージできず悩む学生も多かったのではと思います。とりわけ短期大学の学生はその傾向が強かったのではないのでしょうか。また、違う側面としてインターンシップに参加できる機会と時間は増えるので、こちらはチャンスと捉え、ぜひ積極的に参加を考えてほしいですね。自身の将来を考える上で、社会人と触れ合う機会・仕事や業界の理解を深められる機会は、学生にとっても企業にとっても決してマイナスではないと考えます。

Q 企業研究の仕方について教えてください。

A 扱っている製品や規模、事業の強み・弱みで企業同士を比較する方法もポピュラーですが、入った後の雰囲気や風土などを併せて見ると良いと思います。例えば、システムエンジニア(以下SEと表現)と聞くとどんな雰囲気を感じられるでしょうか。すべてに当てはまるわけではありませんが、金融系を顧客に持つ会社のSEは比較的几帳面な方が多く、どちらかというと正確性を強く求められる風土があると聞いたことがあります。一方、以前お話を聞いたゲーム制作会社のSEは、打って変わって皆私服でわいわいと会話をしながら、遊び心を大切にしている風土で働いているそうです。これは、「普段の仕事の中で、自分たちが楽しみながら、ある意味遊び心を入れながら働かないと、楽しいコンテンツは作れない」というこだわりを持つているからだと思います。同じ職種でも、会社の大事にしていくことや顧客の思いなどによって風土や空気が全く違うので、企業のスペックや事業内容だけでなく、入社後イメージできる観点でも比較した方がよいと思います。得てしてこういったことはネットだけでなく実際に赴くことや、働く人に話を聞いてみないと分からないことも多いです。インターンシップやOB・OG訪問を活用すること、そしてどのような顧客を相手にしているかということも調べてみることも必要ですね。

また、自分がどのようなことを大事にしたいか、興味があるか、ということも企業研究の仕方は変わってきます。例えば、家族との時間を大事にしたいと考えるのであれば、福利厚生を軸に企業を見るなど、その人によって視点は変わってきます。最終的にそれが志望動機にもなります。

Q インターンシップに参加する利点を教えてください。

A HPなどのインターネットの情報だけでは知り得ない企業の実態や、働いている人の雰囲気、風土などを掴みやすいという利点があると思います。仕事内容や扱っている製品などは、調べればインターネットなどに載っています。しかし、どのような人が働いているのか、どんな流れで仕事をしているのかというのとは実際に体験してみなければ分からないことが多いです。それを体験しながら知れるというのは、企業研究にも繋がると思いますし、社会人

とはどんな人達なのかという点を体感できるという点で非常に良い機会だと思います。志望動機など、何故自分の企業なのかと聞かれた時にイメージを持つて語りやすいというのは学生からよく聞きます。

Q インターンシップに参加する上で心構えを教えてください。

A その業界や企業についての下調べなどはもちろんですが、参加する前には必ずどういう目的を持つのか、例えば仕事内容のことが知りたいのか、雰囲気を知りたいのか、学びたいことは何かを事前に決めておくといいたいでしょう。そして、その日その日に感じたことや学べたことは記録を残しておき、終わった後には振り返りをするべきですね。何となく参加して終わらせてしまつては、正直勿体ないと思います。

Q OB・OG訪問について教えてください。

A インターンシップに通じる話ではあるのですが、働いている人たちがどういふことを思っているか、何を求めているか、といったことを聞いてみるのが、調べる上で非常に重要なポイントです。特に最近では入社後ギャップという話がありますが、企業研究をいくらしても必ずイメージ通りの会社であるとは限りません。入社前と入社後にどうイメージが変わったのか、良いと思った点はどこなのか、若手の社員さんなどに話を聞くといイメージが付きやすくなるのではないかと思います。「第一志望ですか」という質問に対して、明確に「はい」と答えてくれる学生が少なくないです。人事としては、内定を出すからには一番だと思つてきちんと来てほしいというのが本音です。そこで少し迷う素振りを見ると、何故そこまで意思が強く持てないのか、いったいどこで引つかったか、といったことが気になるので、学生の心理としていくつかある内定から選びたいというのは、もちろん人事の方たちも分かっています。しかし、企業としては会社の戦略や方向性を考えた時に若い人材はすごく大事なことで、当然内定を出すことには慎重になります。それにも関わらず、ある情報があるならその情報を提示してあげることが時には大事なのではないかと、思います。

Q 面接、二次面接へ進むにつれ、企業の見方は変わっていきますか。

A もちろん人が変われば見る観点も変わっていきます。例えば現場の社員よりも経営層などになってくると仕事内容というよりも、長い目で見てこれから会社で働く上でこの会社をどうしていくか、先を見越した質問などがされる可能性は十分にあります。最終面接では意思確認をするために面接をする企業も多いです。それまでの面接で学生の経験やパーソナリティを知らず、積極的に採用したいと思つているが、いったいどれほどの志望度を持つてくれているのか、本当にこの会社で働きたいのか、という意思確認をしたいというのが、面接が進むほど強くなると思います。最近の企業の声として、志望動機が弱くなつてきているという話をよく聞きます。「第一志望ですか」という質問に対して、明確に「はい」と答えてくれる学生が少なくないです。人事としては、内定を出すからには一番だと思つてきちんと来てほしいというのが本音です。そこで少し迷う素振りを見ると、何故そこまで意思が強く持てないのか、いったいどこで引つかったか、といったことが気になるので、学生の心理としていくつかある内定から選びたいというのは、もちろん人事の方たちも分かっています。しかし、企業としては会社の戦略や方向性を考えた時に若い人材はすごく大事なことで、当然内定を出すことには慎重になります。それにも関わらず、ある情報があるならその情報を提示してあげることが時には大事なのではないかと、思います。

Q 理科大生の就職活動の特徴を教えてください。

A 理系学生全般に言える事ですが、有名な企業ばかりを受けるということや一つ挙げられるのは、方向転換が必要になつてしまつたという方が多いです。その気持を大事にして社会人生活を送つてほしいと思います。

ジュールだと、入学後2年で将来を考えなければいけなくなるので、ある意味、自身の専攻や今後目指す専門領域が明確でないまま就職活動に突入する学生が少なからず存在していたことも事実でしょう。中にはゼミや研究室に配属される前に、どんな専門分野で勉強していくかこれから決めようという時期に就職活動が始まっていたので、自分の進路や将来やりたいことがこのタイミングではイメージできず悩む学生も多かったのではと思います。とりわけ短期大学の学生はその傾向が強かったのではないのでしょうか。また、違う側面としてインターンシップに参加できる機会と時間は増えるので、こちらはチャンスと捉え、ぜひ積極的に参加を考えてほしいですね。自身の将来を考える上で、社会人と触れ合う機会・仕事や業界の理解を深められる機会は、学生にとっても企業にとっても決してマイナスではないと考えます。

とほどんな人達なのかという点を体感できるという点で非常に良い機会だと思います。志望動機など、何故自分の企業なのかと聞かれた時にイメージを持つて語りやすいというのは学生からよく聞きます。

Q インターンシップに参加する上で心構えを教えてください。

A その業界や企業についての下調べなどはもちろんですが、参加する前には必ずどういう目的を持つのか、例えば仕事内容のことが知りたいのか、雰囲気を知りたいのか、学びたいことは何かを事前に決めておくといいたいでしょう。そして、その日その日に感じたことや学べたことは記録を残しておき、終わった後には振り返りをするべきですね。何となく参加して終わらせてしまつては、正直勿体ないと思います。

Q OB・OG訪問について教えてください。

A インターンシップに通じる話ではあるのですが、働いている人たちがどういふことを思っているか、何を求めているか、といったことを聞いてみるのが、調べる上で非常に重要なポイントです。特に最近では入社後ギャップという話がありますが、企業研究をいくらしても必ずイメージ通りの会社であるとは限りません。入社前と入社後にどうイメージが変わったのか、良いと思った点はどこなのか、若手の社員さんなどに話を聞くといイメージが付きやすくなるのではないかと思います。「第一志望ですか」という質問に対して、明確に「はい」と答えてくれる学生が少なくないです。人事としては、内定を出すからには一番だと思つてきちんと来てほしいというのが本音です。そこで少し迷う素振りを見ると、何故そこまで意思が強く持てないのか、いったいどこで引つかったか、といったことが気になるので、学生の心理としていくつかある内定から選びたいというのは、もちろん人事の方たちも分かっています。しかし、企業としては会社の戦略や方向性を考えた時に若い人材はすごく大事なことで、当然内定を出すことには慎重になります。それにも関わらず、ある情報があるならその情報を提示してあげることが時には大事なのではないかと、思います。

Q 面接、二次面接へ進むにつれ、企業の見方は変わっていきますか。

A もちろん人が変われば見る観点も変わっていきます。例えば現場の社員よりも経営層などになってくると仕事内容というよりも、長い目で見てこれから会社で働く上でこの会社をどうしていくか、先を見越した質問などがされる可能性は十分にあります。最終面接では意思確認をするために面接をする企業も多いです。それまでの面接で学生の経験やパーソナリティを知らず、積極的に採用したいと思つているが、いったいどれほどの志望度を持つてくれているのか、本当にこの会社で働きたいのか、という意思確認をしたいというのが、面接が進むほど強くなると思います。最近の企業の声として、志望動機が弱くなつてきているという話をよく聞きます。「第一志望ですか」という質問に対して、明確に「はい」と答えてくれる学生が少なくないです。人事としては、内定を出すからには一番だと思つてきちんと来てほしいというのが本音です。そこで少し迷う素振りを見ると、何故そこまで意思が強く持てないのか、いったいどこで引つかったか、といったことが気になるので、学生の心理としていくつかある内定から選びたいというのは、もちろん人事の方たちも分かっています。しかし、企業としては会社の戦略や方向性を考えた時に若い人材はすごく大事なことで、当然内定を出すことには慎重になります。それにも関わらず、ある情報があるならその情報を提示してあげることが時には大事なのではないかと、思います。

Q 最後に、社会人になる上で心を得るべきことを教えてください。

A 学び続ける姿勢が大事だと思います。というのも、就職活動で内定をとることもありますが、入社してからどう働き続けるかということ、直、今まで学んできたことを経験してきたことが時に通用しないこともありますし、挫折することもあると思います。ただその時に、上司など周りの人の意見や工夫、知恵みたくなもの吸収しながら成長していけるかが重要であると思つています。それには学びたいという意欲がなければできないことです。受け身ではなく必死で成長し続けるという意思をもつて学びたいと思つています。是非その気持ちを大事にして社会人生活を送つてほしいと思います。



▲取材に協力していただいた大谷さん